英國の子供小說

オリバー・ツ井スト（第三）

永代美知代

オリバーは惡戲小僧やベートといふ少年に連れ出されて、町へ行つた。而して、大通りから餘り遠くない横町に差掛かつた時、『惡戲小僧』が急に立止まつた、唇に手をやつて、二人の仲間を二度も甚く引張つた。

『何だ、何だ？』

オリバーが驚いて聲を立てた。

『シッ！　そこの本屋の前に男が居るだらう、あいつだよ。』

『向ふ側に居る紳士かね。』

オリバーが斯う訊いてるまに、も一人のベートは云つた。

『よし來た、素敵だね。』

二人の仲間は向側に渡つて行つて、紳士の背後に接近した。呆氣に取られたオリバーは、如何した譯か解らぬながらに、仲間の後に從いて歩いた。本屋の前に立つた紳士は上品な人で、一生懸命書物を讀み耽つてゐる。『惡戲小僧』がこの紳士の隱袋に手を入れて、手巾を引出したと見る間に、ベートと二人で一目散に驅け出した。オリバーは初めてスリの仲間に加はつたと知つたので、急いで逃げやうとした。その瞬間、紳士は氣がついた。

『待て！　泥棒！』

書物を持つたまゝオリバーを追つかける。すると『惡戲小僧』やベートまでが自分の罪を晦ますために、一緒になつて『待て！　泥棒奴！』と怒鳴つた。四周近所に居合せた牛乳配達から學校生徒から、車夫から何から、みんな大聲に怒鳴り散らして追驅ける。丸で狂のやうな騷ぎだ。

とう〳〵オリバーは、へト〳〵になつて巡査に引据ゑられた。巡査はオリバーをスリだと睨んだのである。だが、最初からの樣子を見て居た本屋の主人が飛んでオリバーのために辯解してくれた。ブラウンロー氏といふ例の紳士は、ひどくオリバーを可哀さうに思つたので、自分で引取つて家へ連れて歸つた。段々憐れな身の上を聞くと、なほさら同情し

て、親切にいたはつた上、オリバーの好むまゝに自由に本を讀ませたりした。まるでもうオリバーのためには新天地が開けたやうに思はれた。

一方猶太人の仲間は、オリバーの脱走を聞いて怒つた、怖れた。オリバーが彼等の洞窟を知つて居るといふ事は、奴等に取つて非常な恐惶である。自分達の安全を計るには、是非今一度オリバーを連れ戻して、泥棒仲間に仕込むより外手段はない。で、猶太人は自分の手下のビル・シッケスと云ふ馬鹿に亂暴な奴と乞食娘のナンシーと、この二人の者にオリバーをねらはせた。ビル・シッケスは始終太い棒を持ち歩いて、おまけに獰猛な犬を連れて居る。

オリバーは、一日後には全然元氣を回復した。ブラウンロー氏の使で本屋へ行つたが、その途中、ふと少女の呼び掛ける聲がする。

『兄さんてば、よう！』

オリバーは何事かと思つて立止まつた。と、思ひ掛けも無い、少女は突然オリバーの首にかぢりついた。

オリバーが驚いて譯を聞いたり離させようとしても、兄さん〳〵と泣き聲を立てるばつかりで、終には他の婦人から怪しまれるやうになつた。

『一體どうしたんです？』

婦人が斯う訊くと、少女は泣きながら話す。

『斯うなんでございます、これは私の兄なのですが、一月ばかり前に家を逃げ出しまして、泥棒仲間に入つて、不良事ばかりして歩きますんですよ、家は生活も苦しい上に、母はもう心配のし續けで、本當に困つて居りますの。』

『何を云ふんだナンシー！　僕は孤兒だよ。』

激し切つたオリバーは、つい口をすらした。少女は猶太人の洞窟で見知つて居たのだが、初めのうちは咄嗟の間に誰とも思ひ出せなかつたのである。

『孤兒だなんて！　だつてあなたは私の名を知つてるぢやありませんか、何と云つたつて私の兄さんよ、ねえ奥さん、さうですわねえ。』

少女はオリバーを嘲るやうに云つた。

『なんて極道だ！　おいオリバー、愚圖々々して無えで、直ぐ家へ歸んねえ！』

居酒屋から出て來た男が、突然オリバーを引張つた。

『僕は君等と關係ないんだ、離し玉へ！』

『駄目だよ、家へ歸るんだ。』

『さうとも、若いのが惡い。』

其處に居合せた大工までが合槌を打つ。オリバーは遂に斯うして、再び猶太人の洞窟へ連れられた。抵抗すれば例の獰猛な犬が直ぐにもかみつきさうに身構へてゐる、ブラウンロー氏から預かつた五磅の小切手まで取上げられた。オリバーはブラウンロー氏から自分が盗んだのだと疑はれるのを心苦しく思つたが、仕方がない。探しに來られると大變だと思つた猶太人は、オリバーを四五日間押入の中へ隱まつた。だが、如何がなして早く惡黨仲間に引入れやうと思ふのだから、或夜の事、オリバーはとう〳〵ビル・シッケスと他にも一人の惡黨に連れられて、押入り强盗に行かされた。

シッケス等はオリバーを强迫して、一言でも聲を立てたら殺すといふ。とある家の地上五尺ばかりの小窓から、オリバーを忍び込ませて、表の戸を開けて、自分達を呼び込めと云ふのだ、小窓は小さくつて、とても大人には忍び込めさうもない。併しオリバーのやうな子供には譯なく入られる。

『オイ小僧、裏切つて見ろ、只は置かねえぞ。』

シッケスの聲を聞き流して、中へ忍び込んだオリバーは、もう死んだつて生きたつて、如何だつて可い、家の者を呼起してやらうと考へながら、ソッと忍び足に歩いた。

『歸れ〳〵！　歸つて來い！』

シッケスが急に怒鳴つた。その聲で四周の寂寞は破られた——灯が見える——着物を引かけたまゝの男が二人、すぐ眼の前の階子段の上に立つて居る——火花が散つた——音がした——煙が出た——そしてオリバーは後に倒れた。オリバーを引戻さうとして襟首を掴んだまゝ、シッケスは二人の男を眼掛けて自分のピストルを放した。

——（つゞく）——